

冊數	番號	部門
三	一四七	五

卷之三
七

近江輿地志畧

十

日	足	日
足	日	日
日	足	日
足	日	日
日	足	日

69

同上
正徳元年
江輿地志畧卷之三十九

江輿地志畧卷之三十九

生早郡志賀郡第三十

一 別保村 今別保山 猪所山の西にあり年毛

栗澤 有馬山 西庄本の下猪子中庄別原五ヶ村と成
居る村也馬場松もひとつ古村もひあくと馬場松
中とのちのちを名川小小河村と云ふ栗澤七村と云
豪族あとは洋と栗澤の事なりと云ひけんと傳ふ
もく。源氏足利毛比のうち又土田保とあると云ふ志
ゆく毛比のうち又土田保とあると云ふ志

同上
正徳元年
江輿地志畧卷之三十九

國栗津別保地頭職事右當社昔在去外國麥東之
城遷本朝君子之列從來明德光千千古冥祐被于
邦就中最祖豫州大守專抽歸心厚蒙靈昧因溫往
蹤彌增渴仰仍奉寄當保畧曆應五年四月二十二
日征夷大將軍正二位行權大納言源朝尊氏判義
詮寄文曰寄附新羅社近江國栗津別莊在事右仕
一曆應五年四月二十日御寄附狀等當知行乞は
上早領掌不可相違之狀如件康安二年二月三十
日從一位源朝臣判毛毛とソアラシニキニ西赤津
の五別保ナリ本多昭重一國のヲメニ右室を乞保

あとは神向三統紀又曰白河鳥羽ノ邊ノ彰立之地
カモイ美くナリテ玉山の名も有る百丈マナリ又活量
ナリ、固山仰保ねむひくハシミタクシテくよしアリ
國代をさへ、固と云フテウハシテ礼也トナムニ
や必文治の始もよ宇喜田城と拂一庄を乞保地
致セキモナリ、ナリハシミタクシテくよしアリ
トナリ、御保のノ、洋と初喜セモアリ、御保者又、舊
絶起も乞保くが、天武天皇の化モテは浦上、下
八町敷キモサリハ奈良治人ミモニシテ名源あて列浦
ヒテモナリモ栗津別保乃モナリ也ナリモノと

極樂寺放生會白風元年八月十五日とあまの爲起
行者とし神社普もと拘りトテ豊前あま宇佐ノ帳
放乳會の奉書を四字一起く法の放生會も併せ
ゆきとありとむれと縁起乃向ひし別浦より
乃般ソイ

一 美文八幡社 五保 あうとみふとら生中仁源天皇左臣
彦神 天皇右大臣高根綱紀曰人皇四十代天武天
皇白風四年トミニ宇佐八幡託曰近江國於御邊吾子
大鷦鷯仁徳天可崇敵帝不日幸湖邊干時立紫雲金
色鳩飛來居喬木是則今栗津森八幡宮是也帝益

有信志始詔此浦上下八町禁殺生之事尔來漁人
忍之名曰別浦明年八月十五日行放生會事人皇
四十五代聖武天皇天平十三年辛巳依當社託宣
於國分寺講仁王經當年依有勅願三社造営焉
每禮亦九月九日也少しだのちハ大社からソレ
余どものくのくめシスナガレモ膳所陽下町の中そく
西の庄ハ大社の庄と南社の庄と北庄上庄と大社と
足立庄

天照太神又 本殿乃右大神宮の左にあり

白山權現社 本殿乃右大神宮の左にあり

新羅大神社 半社のああら門多居社作とも三

井乃剝薩の神を勧請する。又も氏義詮と云ふ
剝薩の神とある。多居半社のよも。栗原お保の
御子孫。また御子。一毛りも。そのうち。勧請耳
石代也。又も氏義詮は寄文二通。又も井守も
多くは神なり。詳く固嘆乎。譽肉の新羅社の系
下にも。馬鹿。王號也。半社也。其事也。其事也。
吉良八幡社。左も栗原。右も御覽。曰。固も。手の別。而
毫端。又も。昔。唐人。皇七。代。近。傍。流。仁。年。二。年。又
詔。蓋。鳳。爾。て。自。帝。詔。也。其。事。源。都。改。勅。と。も。く

惱もと對ひ。少しひき止り。その時。揆。忠。通。之。と。白
焉。委。今。通。ち。ト。と。つ。し。業。う。不。惑。モ。キ。ム。ト。と。
妙。災。使。可。る。の。御。惱。よ。と。系。附。御。と。傍。浦。ひ。も。つ。
革。脚。の。も。傷。と。内。表。ね。つ。一。も。傷。則。行。手。か。多
き。か。と。年。月。を。移。く。ば。多。傷。と。寃。冤。公。怨。體。體。と。す。
信。心。心。や。而。か。と。え。後。人。皇。セ。セ。代。傍。白。河。に。保。元。二。年。
帝。國。幽。る。聲。療。を。と。も。疾。か。群。臣。り。あ。テ。佛。神
小。祈。包。可。或。而。帝。乃。御。若。と。老。翁。桑。翁。の。と。一。枝。拈。也。
曰。ほ。心。う。ら。ノ。一。ば。事。者。少。く。ね。あ。く。く。所。に。う。ら。

は至らしく御惱急す年愈々す。帝に御召乃
よりと侍下に侍立す。御内侍等御内にて奉仕すを
ひきしきの名也。云ふ事。曰。汝君自ら又は我と
敵なるの事と感。一朝の夜と寐て。御惱
年愈々。」と。御内侍の後を。不思ひも思ひ御奉事
と。御内侍を拂はず。天氣改て。傍候す。御上奏
今更願ひ。御内侍。御内侍。御内侍。御内侍。
實る。多乃歟。事。一。奏。少。御内侍。御内侍。
御内侍。御内侍。御内侍。御内侍。御内侍。御内侍。
誠く。は。ほ。の。御。惱。年。愈。一。は。く。之。帝。の。ゆ。ち。重。め。れ。ん。

号をうるむべとす。縁起は近世へまづあらりと
ひもすにあつて、物語は御石山寺別不の萬師
なり年、ぬきよしは後方保ハ惣の男也。安室氏トと
今サ也。遷座にはともハ縁起の事ナリ也。
一 兼平寺 おほくわづかと申す。井もとと津吉が縁起
乃多寺ノ字を名ふ。書院文七十年、海有ムと刻也。
津吉は勇士の名とあらひ。事と述す。士卒ニ勇
神儀也。又一塔を築く。總てと起。士卒ニ勇
名と云ふ。シテ之を率軍傍もとと六七町南
東原野に原の備く。以降也。

一 西念寺 おほくわづかと申す。西念上人の寺を大津事蹟也。乃
あらゆる。五傳西室上人。けむと庵と宮と後大津事蹟
あらじつ寺。墓にて。今もあら。裏階寺のあらじつ寺也。
一 今井跡(のきの跡)。西念寺足向。石面ある。若葉
の文字。下井。ス。いわば。今井氏もお保乃。以是
よしもく。明アリ。

一 今井四郎兼平墓。雲津松原八町縫手の西二町モイ
田の時。墓石に書いて曰。兼平之忠諫別勇突出
古今愚婦童昧道唱巷説膳所城主木多下總守俊
次也。索古地志石誌有志者豈不感歎哉。見義輕死

亦勸善之謂乎經曰乃至童子聚沙爲佛塔是爲善
提菩薩緣况造立圓滿法身佛乎寃文元年辛丑十月
二十一日大因院岡山賜紫沙門萬源書于今その
文よりも少しこへば先お傳の初と中古をくわらべて
かの福島より渾百公尊ちろと達ひしゆくて後寃文七
年丁未八月三十日今この地にてつゝて今井四郎左衛門姓を
中原住濃國の人本曾仲三急をうすなり義仲乳女之
義仲一母と住り起してヒノ以降每年一とじて終り
寺はいと云ふ事あり一義仲勅命して省く乃て屬領て
屬領す。五年正月の日めづきより陣かゝる湯殿せ

一義仲のねどとくし勢団と争ふて勝てぬ
義仲の軍隊は、軍隊より少で且ち且近亦お兵と
戦ふて敗つて、敗るる軍隊を小めにて義仲を
自殺せしむ。自殺せしむとて義仲一軍が敗て自殺せ
しむ。義仲防護乃御とて、自殺せしむ。義仲二年
四月廿二日、伊水邊など掩そりにら隠れ、當面
在はる様す。義仲をもひるい。義仲、右衛門
義仲は別軍隊の軍と述べれば、いかにも云
石田門を畠中に一車の竹籠す。義仲以てうちとも
義仲をもあくはれず。左の名うりとす。

義平始末を參連を除し、年號一も記しない。
毛じまと云ひて西の旨人臣の事うる義平と
形あると考す。危難の時に立ちてよけがくと云ふ。
あらば生むかと云ひ易い。はと清水君の隨食
毛りつてやれもれい一の御朝とをほの
饑と傳せんと云ふ。伊豆守平家の因
修すと移行納一係の後も亂を起す。平氏行
心とさへのしりす。されば了承す。而して
源氏とばくわかれや詳もんじ。事不直也。
一

過兼平墓詩

一 軍門命賦獨抽忠時運空衰失戰功日暮孤墳春寂
寘年二荒草偃英雄

垂加詩

朝生夕讐不可忍不行不犯未為尽見危投命有兼

平遺恨失於黨逆心

天滿天神宮

ち保

多有事御營おみ代えたり

御侍の多記洋々と別せぬまほ泉石の泉石をより
御育む想入地久く

大將軍令公孫とゆけどくかこしん材の山中也。

らと社のうちな北を十畝内の樹木とすと佛經

にイリ申れり。首楞嚴經上天大將軍注曰即天帝處

一 営將也分住三十三天各領鬼神鎮護四方是朝
臣按此云新撰陰陽書大將軍大白天上客太一
紫微宮方伯神不居四仲行四方三歲正一移百年
不可犯也。太白也西方之主全の星也。也。也。
と奉つる方伯の神也。十有三年四方と運ノ神ア
活妙八人とも極めなし。戒行とくも少アされども
のハツカノ直弔ヒタクル事ありにも。卯乃カとモと
鳥也。一宮單乙辰四神。おもへえをと申トモア
毛筆等とてスルトモ、陽陽者も。況と用筆毛筆毛

一

一行住菴。る辱。モ仰げ高妙也。中は中度年从
香社の奥内にして。ふと見。今夕は。うつを。今ち此
のゆき。も。差し。まく。能満。な。の。と。芭。美。の。人。を。を
芭。芭。ナ。ヌ。ミ。は。養。ト。若。ト。久。ヒ。締。想。息。の。を。す。之
芭。芭。幻。體。高。の。記。曰。石。山。の。世。岩。る。多。勝。山。う。ア。國。山
も。本。木。か。國。も。ち。力。も。と。傳。ト。あ。也。驚。ト。細。手。毛。也
添。ト。四年。深。山。も。本。三。曲。い。る。う。ト。テ。ハ。临。え。そ。ア。也
多。ア。神。所。が。自。化。の。も。傳。ト。ア。也。第一。の。も。ア。も。も。も。も。も。
五。教。者。と。か。も。利。益。刀。塵。を。門。立。す。ま。ま。ま。

信塔 ま乃山よりとづく、根世野とがシ、をはり
聖山より孤狸ぬと博アイの信居とす。され
て又アリをも年十一年アリテ、五年アリテ
毛利家臣のものとなり、場千刀を教れて奥西
多はアリテ、西とアリテ、五年アリテ、
少海ノ志成ときもとをなす。今年春湖のもの
は、山に生し、草には草の花、あつた花の一本の陰
に、さとく射場を設け、せら垣を結ゆかして、卯月

の御とみをとく、山ノ石にて御とみをひ
きのうすす、なるのちめも遠く、御は一、
あゝ山巣に、御もとて、もあわる
名の使とおは、ものは、くも、とくと
そくと、北、北、北、北、北、北、北、
ぬ洞庭、山の申とおもなむ人ありて、
一、山の申とおもなむ人ありて、心、心、
日枝の山は良乃木根、木根、木根、木根、
山の橋、橋、橋、橋、橋、橋、橋、橋、
乃木田、木田、木田、木田、木田、木田、木田、

敵の如くもあらわすに忍びてすましとす事す。ト喜

一 粟津古戰場 木曾義仲と源記相變經と稱ひ

義仲以て丸を奉り、盛衰に詳む。

一 粟津壁 粟津壁 粟津壁 粟津壁 は魚を古
物と詰り、平賀膳所傳下山色馬場に在今ハ町
繩牛の毛と粟津壁と云々を今先粟津壁と
詠むる者も多々有る。

益能

粟津壁の尾を引くやうして、駿河守を當らゝ利

後拾遺集

粟津のそくら乃高はのくみをももつしぬやと聞る

一 粟津壁 粟津壁 粟津壁 粟津壁 在笠内大臣
ともいふはとその上、粟津の巣ゆくと日引つ
てかに故 粟津 え玉集 え玉集

一 粟津の巣の名の如く蛙ちくもるの匂で深く耶あ
え玉集 え玉集 え玉集 え玉集

一 粟津の巣の名の如く蛙ちくもるの匂で深く耶あ
け玉集 え玉集 え玉集 え玉集

後拾遺集

え玉集

一 粟津の巣の名の如く蛙ちくもるの匂で深く耶あ
け玉集 え玉集 え玉集 え玉集

新宿邊

追坂乃多の事をくわうにうり朝方見る雪原の東
は峰車までと傳る。うきよのまへて

境井のまへて

又本堂

高家

夜乃うちれ夕若多の國をくゆてあまはの里に奉手利
多石川村 膳所門脇田口ヒノ八町隣もせきくは村
西八町纏キシツトも多石川の入口にて十二町も
桟多く土俗或は住古ふ保あまハ情乃を有アリ也

多云或ち小太田村叶盡の地也多云多云
ナリテト多石川村民あり傳ヒ帽也人多云其
川も足多石川也源少ちぬの事也人傳也多云
村田惣の事也多石川余も人傳也多云其
事也人傳也多石川村田惣の事也人傳也多云
各原多云多石川村田惣の事也人傳也多云
其地也人傳也多云其事也人傳也多云
叶盡大田惣也多石川村田惣の事也人傳也多云
神と効活すもと人多云とて度多云年つば効活

長徳寺　多宝門　打合を一向宗佛光寺の末流文明

十七年三月奉旨于京口之行

勢田右衛門 物力多と栗山妙庵とことこと義陽
を鷹乃西の主とつゝてあらん天武天皇と大友皇
子と川を隔て後山上大友親の以て自落したる高原
を知り御内考源天皇と送り書、也れ不亂とて大友兵
移て焼くに附くまほ安徳天皇と寿永二年七月大友
新中納言と盛とて有る義仲と改し平ひ野は源範
頼則頼勲乃命とひて入彦して義仲と計て之を
義仲軍平とよて附くじと見平めと後多羅院義之

年ノツトニテ、乃は兵士ニ率テ、上焉ヤハサク、左軍山田
守常、主也。軍士ナム一にて、一日ト而ナムニ、右軍
敗績。捕乞得て、連武の妻ヲ利する氏、某モナ
事。帝國を祀る、名ホシ。長年、アリ。はして、勝
利軍勢、いも。長年、アリ。て、勝者、祭也。等
と、天下ノ興廢、アリ。の、大事、成。アリ。トモ、此
が、事。か。するの、義ナリ。されば、其の、事。也。
少、太陽打。毛色、毛店川。河の西、あく。毛村。う。河石。ま
ち。手の、門。京の、少。太陽打。う。河の、名。毛村。

ウシトモサヘモル詳あきらめ大左衛門とあはせ
アモタツヒテケセ太友白まみヅカの地へ迎えられ
キテレモもちよへりてはなれ大社を圓うちヤチ歐寺
通票を立ての鶴鹿をあふれん以神をまわとくう院
あれどあつたは今少大政打田園の家へ階田黒田
伊田御草木屋竹田あとう地をりもみ右大社たるの
院うすきうすく社地し裏櫻一モ今乃如テ小社とは
カホミノ脛御八座の神がうえ延喜式の神名帳
載入なし今之神乃もアトモアレハ倭神社八座
神は小猿神也久々西社も往古大社と云はれ候

八幡社 本社乃傍りに國幸寺、高尾寺、難夢
正光守田 以ち故に四國の事、右を固分する
内に之に従事して四國の事、その名前も四
國の後を佛國寺とす。又曰く、大鹿寺、其
一西光寺、少佐政村、一白、五色、白鷺の五派、
一國より出る。少佐政村のありは、右もからめあひて、
かくもとす。うち居のこくわざを満たす事、奉大
也。といふに、不五音のよきを害しませう。

國ノミタニハ、今四國ノ木ノ首のニモ傍リトヘシ

大ひきく碑有在カリ。推古治要曰天平十三年毎國

一國分寺建立。日本後記及日本紀畧曰弘仁十一年十一月庚申近江國吉國分僧寺延曆四年大災燒尽、伏望以定額國昌寺統為國分金光明寺但敕本願釋迦丈六更應奉造又應修理七重塔一基許之。日本紀畧曰割近江國分寺供料永定延曆寺僧二十四口之供養。延喜式二十六曰近江國正稅公廨各四十萬束、國分寺料六萬束。類聚國史亦百九十九殊俗部曰桓武天皇延曆十八年

七月有一人乘小船漂著參河國、以布覆背有犢鼻不著襪、左著紺布、形似裝裝、年可廿、身長立尺五分耳長三寸餘、言詔不通、不知何國人。大唐人等見之僉云崑崙人、後頗習中華語、自謂天竺人、常彈一絃琴歌舞、哀愁闇其資物有如實者、謂之綿種、依其願令住川原寺、即賣薩身者立屋西堵外路、廻令窮人休息。嘗後遷住近江國國分寺。江家次第伊勢敕使進充條下曰近江國相兼利勢多驛、國分寺前勢多藪不下馬、今持弓矢、拂り身の陽上、今來矣也。

國の事本大石光誦之所勅也。盧裏記を流罪
傳下曰西粟は國の事本也。即ち入る。口書
旨今升四帝。五年五百餘萬。國のもの。門
禁止降をも。ナリけふ。生含汚蔑。ひよ。方考。之帝
之生義弘も。あくまでも。勿考。そ今存する。ノ。壁と
河とい。塔乃壁ともい。或之門乃壁とも。こうて右の
方へ去れば。外國の事。塔曰多。多。經曰石佛
寺の御邊。夙の御邊。寺と名の塔。系附。田谷。寺尾
寺と云。北山。天年十三年
寺固也。寺と連立。寺後。多。尼寺と連立。

皇代紀天年九年ノ丑毎國造釋迦
像立玉坐也。とちねを後もアリ。而國此玉も尼
寺ツヅル乃地より本セモアシテ。大津近モア五國
主モア行奉れ元莫モヒ傳れ。ナヘ。朱據勿多モアレ
トヨシシテ。移々國主の條下。ナヘ。折羅國天王寺
壁玉も。玉も。シソ。玉も。アヒ。之を移羅玉の國也。ナヘ。玉
主。國國乃天滿也。因玉。玉も。才と。アヒ。アヒ。玉
國も。玉も。玉も。尼寺。ナヘ。天王寺。ナヘ。玉也
玉も。十一面觀音。ナヘ。丹波國。モ。玉も。玉も。尼寺。ナヘ。
御奉作の萬物也。ナヘ。而後玉名多也。玉も。玉也。而後

も事師率テ土佐國固ムるのをもと行臺移テ千
觀音寺伊藤國輔を幼國も率テ行臺少の事師
乃座傷を加ムトシ澤波國に押却思も年も加ム
ちゆは切支どもをもと國も年も國も年もれが
事師も別々トニテ但後世子及テ一派也
もやせ國ももれ本ももれ元
録すふき。自セ。國もも。の土民過ち。そま地
うりづく事師傳の係長ます。もろと得アヒンマ
被ひ。安否。あ。や。近石。玉。も。守。れ。遠。出。か。空。一

八幡社志園紅葉の近津弓の八幡とちくわれ
百弓。本傳源右衛門手乃持守あくと木本義仲
乃多之とゆふこと說を傳說なり

巴ノ宮アラム本曾毛仲の妻巴アラムと名ふ而之之上
偽ナリモア

あのひ栗津は平洋であります。着脱さうへ小袖の袋
束して信濃（しな）を出で、鎌倉へ下りて、小袖の袋
束の和田少佐印義監（よしもん）をして、おまかせを設け
て、和田合戦（わだがせん）をして、後起（こうき）の勢（し）を打たれて敗（ひ）れ、巴（ば

輿地志畧三十九終

近江國輿地畧考之三十六

卷之三

寺邊莊 寺内寺多平津の町西郷内細村等と寺多莊
と多齋は石山莊も古昔留連庄等と不復地名を
石山莊より舊寺田莊也云々 村老又曰往昔庄蓋
洞穴不見也一號號作國之而

鑿櫓
（）から櫓の側に石橋也有西門村之跡地
焉者（）（）相傳舊有高麗碑記不復見到
（）（）（）（）（）

くるかへりあひかへり歴々歎き盡れども確也
迫世引けの風去祀ふをたる御海まほく御山湖參
多ひ負ふべ事多ひ流傳と一の石もまれと窮屈
くの御子多程石造築塔也事ありと云ひ現は用
多ひ事あり人情也田氣化と轉じて妙明也
かくとく。類天地造物の理ありと又と暮らされ望む名
トクアラヒテ山澤ひときす也器の有る所を望
史石の圓の器也圓を凡毛紀今偏不正石毫也極用也
うひとみし似事也今事物相迫圓を空取古
希の物も蒙る宣爾もあひ縫れぬの梁材多也乃其川

の御子多程石造上に江の御子無不轉自とからず
ちとく山背國ふ石も多く布す御子徳く造宗少仰上
ほく御子徳を廻るも今度もと志かと仰に深ふ御子
義は高居くとありうるも小神うる義社高居の徳は重便
地元蓋 菩提樹也あひ。小神也石佛也地元也安立
至年紀未詳

諸御子跡 地元蓋も御子御堂蓋より中間よりも先湯
年中多く供養をやう弘勅の石佛二佛を安置する
がくや竹籠をすすりて奉り御まつて其跡がある
今御子跡の傍は寺主材は桑梨也矣

阿彌善歸去 相傳直至二年三月廿日漢人舉細竹竿
持之以紀人本佛仰之事不復見之而亦可得名也
又云有不見色身所應者多云其民皆是也此是也
佛至那國到那國之國一念之剎那人皆阿彌
善而不知阿彌之名是譯書東方朔傳之云亮彌
善者有尼那國有善者是也此付物人
寺僧所謂 宣和年中某院僧德全嘗懷一時小蟲
止以浩水浴之庭了或取瓦隙敲之以為寺僧曰是
虫之小足其年七八月既久人多色在毫端不復小蟲
矣

董公 阿病葉は未だあをまく原ふかひ御のもの
ある。おまへもあを少く多くあるのである
仲夏五月節以後葉多叶多くそれあつたが爲めに
名うる山間かくく葉未だうる明けれ温氣ふよ
ほく出でぬうる月令か爲葉化する事と傳れあつて

元禄年中の頃よりは畢竟其事よりかは薦の如
かくましく參つては畢竟其事よりかは薦の如
聚と謂ひはひきと毛門の紅葉松の浦の多く
う侍すが邊を廻は多云ふにかはあれども聚す
毛門山の黒原大門山等を多く聚る所のみ
毛門川より而ゆく事かや故まされ終を毛門川の
さうよく此の湖上に營はれ地のものとも思ひ也萬
二番より今まく遅日つて一月より二月少一
義理。京極の信のゆき不移う朝接連まふ東
三條院石山小まくおへりヨリタクおれほく日今

源内より御まわす内かゆく就漢侍すまふ
君、ゆふる度をも極めし今も暮と情のほす
毛門源内とて元源氏物語卷の名づく幻化章
の氣をつてあふの不治病附鬼酒まく跡れ様
義理のねじらう源氏物語卷の名づく是れまた
の外かむとかく一源内はあふもれて出来る御
さればか彼の世の中は多れども源内はあれども
け物をもかとていふも源内はあれども源
をもあらまのねじられ源内とての転けり因
爲て源内をもかとていふも源内はあれども源

もし其物彦の庵の名をかく名付くまへと寓言され
た後世好事者有其あくを以て所事一系跡の條小文
記せ古跡もあら櫻浦因徳寺に浦小光源氏の圓跡多
く相應れ活潑と曰はば謹也

水投石 路ノリノ六間計湘水の中流ノ水落石
石焉。左傍ニ芳何ニシ時ホガ内ル如官也至
者モ被テノ世名アリ。或謂曰。此石ノ上ニ古
湖底ニ入リテ此水落石也。右ニ水落石故
水投石也。又云。此乃は水落石也。又云。此
水落石也。此乃は水落石也。又云。此乃は水落石也。

はよろしく鈎筆を授けられ候事より今朝も少く
お仕事とお出でなされ候事の如きは嘆息の氣
人多き程あるからお手元に

山吹詩 今其所生不詳 蜻蛉見記少く 郡志山記後
考を俟て 漢氏胡蝶書曰 風吹ハ波氏也(全之)
やもゆき也。山吹詩也書曰 山吹詩也(國志云蜻蛉)
也。不詳也。也。也。也。也。也。也。也。也。也。
也。也。也。也。也。也。也。也。也。也。也。也。也。

志馮鷦也ふど原すれ縁紀はもとより不然青白石れ
多情湖山奇觀也原山言曰大凡石色破名色石也奇也
不可復名其山不以爲而以圓也大士は盡無の美山觀
有朋信奇觀也詠詩中有丘軌經等と字焉

石寺 則石山也上山所石先山石寺と号及清が納
枕裏紙山寺也石山也甚事也河海也曰石寺
は聖武天皇御手金碧仙人達三元寺松書及銀
地を極已下本義天皇御取ひある寺を創て大寺の遼
那洞像と謂ふ多金を聚りて薄い地也かねども
黄金ありし帝良不汚仰づ強と白俗圓大和國金碑山也

其他皆黃金也師董別院王少卿と金を磨く洞像の薄
土也は正がんと於是也良辨金率山也持金寺と小羣
少翁王參と曰也少は黃金敵と自恣あん今酒器別方
を示さん也圓勢多少一山也如聖觀自立是處の地
油印とふ至く持金也よ必黃金を磨てと云矣便解
少翁の持ふ毫端在山ふ在了と見て拘多同と曰何人や
舊曰御は是山主は良辨也良辨は觀音の是色もとて
事をこうく石見矣其原少翁と産を傳し如玉梅の像
を毎一持浦高家與易得と莫金を貢ひ其後改元れ
大延長後と遠す先主の像と產を收む并金別院王の範

金別院を造り左房が易ひ基址を失ふるゝ事又
天の川澤を廻るゝ蓋是地と云

前序

長経

おまじめに石を拂ふあらうめのねの丸

新拾遺集

宮方

萬葉を温ひてか山は陰やまづんぢすも先之頃矣

新拾遺集

考標女

翁川の源は多と聞かず知り得る所無く由
廿二首歌の中左房山事園の傳承と左房の源は
アソふも少く記し

又本抄

考究

あいそよきあれ盡ふみつゝやうのそよぎ秋の月
蜻蛉日記日石ゆふ希く敏くとく清の空は澄みとく
和音さよく芦の声を清き紹うと景物清多歌中春
も日一室院の席ゆ公達のは樓殿庭の鳥が公の席當
融庵の後せひ多くは猶やそよん石の根根を
ありとく年、さうともひづる長保三年の秋望るの内
先やあらん。け事やせぬや根そんとくもあらう
ほな月の圓ひ細く系をあらむとく常國の園の下をま
實は山城名細き事あつちそれふとぞされてあまく

翠山園落葉秋一丘山雲將去尋湘水東流
疊巒真仙館奇石怪岩皆鬼面系氏擇亮記源氏
銀画亦入施召不云 足利義親之子一七日升御小參義
而下之之後太平化之子也。勝松中子之二王門者
世又町也。中大年ノノ勢田口八町勢田ノノ多右門
石移ノノ十四町多右門石移ノノ原三王門ノノ十三町
原多右門ノノ源五代ノノ近江國源空寺多右門ノノ内
七年九月多右門修院長十八年七月九日元和三年五月十
七日寛永十六年十一月九日寛文五年七月十日先刻之旨
寺全收納而不可。相違焉。仍如御自多三年六月甲辰

少佐 きく守寺惣門の前を左左方山から傳ふる
ニ端多度の後也多神志洋古候度統のみ拂ふ不自浪を
あひ松山行ひ曾く夫婦は縁と引く所極多々墨事記
古事記曰少佐古治後送信姫世紀治在候祀あ紀宮東記
古縁多甚あ紀津波也源浦名御り元々無年も少く
アリ多御馬か一齋も多御馬也少く御馬也
高貴美尊あらシシケル今極多姓久源昌
布直高織今蓋高織即ち織也源魂多系伯経布綿
玉世義理多訓年復以テ云多織源松もあれハ翁母
殆多也而御子事ノ被のうて庄織布綿也遺意多盡
の絶縁ノノ清もは清也アリ亦夫婦背のま
えテ御も伊勢丹伊勢湯の二尊れ事カタ
被少佐の赤の茶店とて端多度とく後う日山多は
湘は多佐也墨也墨也御事は御都の主宿也哉
本く遊銀也
篠門 二端多度のあみ清也背も「牛鬼」の字アリ
王門のあまで兩側少仰金多

西傍

中霧

松中霧

東傍

湘月坊

多聞坊

東泡坊

梅雨坊

峯也坊

二王門　忠門を今町許東に向ひたすほし傷き多々
金剛院ふ原山院を那羅延と毛佐比所置二王門は傳
通寺は化多々願う石等の三字を書入佐理の筆跡
ありもとより御日幻経の筆ありと幻経日力條師紹
翁の後胤伊豫守の筆書也

齋性院　二王門の東北の方ある

左御院

明王院の西ある

明王院

金性院の西ある

自性院　二王門の東南の方ある

慈光院　自性院の西ある

持壽院　慈光院の西あり臨立障院と名ひ故に

て近世改て天文元頃倉持院と名うる

山月見元吉と号する者として古くからいある

と云ふとあるは勝妙林事と云ふ澤門を退居

相人不居主と云ふとあるは三人と云ふ事ある

乃ち夢子は湖ゆきうきしゆもと源氏小太郎は

能月とも亦一体元師江の庵と謂うと云ひしゆ

は山の景物を以て其の序文に於て後著者元和櫻痴翁
山風の時々の所見足りず其の筆も如其の如きの
如ふとす所見に四次徳る所れども其の光
音也大いに有る所見に金席御酒御風也之頃
其事あらじ是は其四人也志若水南山北海と號
ふとて其の内に日と月と金石等酒清と
其事あらじ其の如所は坊小室まことひやうと
ほくやく名ふ事と云ふ事は坊小室まことひやうと
書くとよかくとひくとひくとあとて有ちうと

小山子晴光薄小薩滿光明小
山子晴光薄小薩滿光明

以爲相招致向右
三王門の西一所行焉其處有石室

先代吉以玄明神靈向之而使君多至不以時之石
座也。丁其事は不記。是日不贊。

竟義種現祐

石壇の半身像

祖師煮

石壇の上半身像

祥子考見立つ。梵書中小弘

法大師の本像を安立。至高姓佑伯摩波國多處弘父

田弘抄刀氏復被僧入俗而立於左脇。二月立龜又年

生も如恩甚爰ゆる。曰生物年十二。舅祖丈阿刀丈、

教世典以文金十八上大學改優傳書。志在佛淨偶落

門。勤修止虛空。極聞持法。未雜聲而事修。徐甫

尉。參詮禪法數多。游十載研究三論。功名兩遺。自

改如室。延曆十有四年。參東大寺壇。支具足戒。又改室。
海昌和二年。海王金剛。第三月。一日。結跏趺坐。仰臥
盧。而泊然入定。先七日。共清弟子。念法勸令。至廿日。
瞑目。垂絕。蓋持是身。彷彿。年。卒。二門人。乃七夕。云
延喜。乃。冬。年。冬。十月。賜謚。法。法。大。師。

良辨。姓白。淑氏。近江國人。其母。親音。像。而。得。二
家。以。母。棄。馬。無。覓。於。指。陸。毫。大。弊。菩。提。燒。而。去。母。豐。臺
郭。鷲。而。往。不。與。家。移。南。京。義。洞。清。春。日。神。洞。見。鷲。鳥
于。野。將。小。見。也。鷲。因。之。而。歷。湖。水。而。解。水。之。西。年。乃。僧

西。至。龜。四。年。國。土。月。大。寺。卒。年。內。供。清。祐。行。事。紀。卷。一。

金鑑不擇。祖師意旨未得。妄保一丁。卒年七十。

擇不以爲是而危難厄矣。予謂之

國之有地者四十有餘。參之以數，則其數八十有八也。

近江輿地志略卷三十七

志賀新著

八重櫻　祖師堂の本堂龕口傍に傳承ありたる
歴代八重櫻を移植して之の生長の歴史一覧表を後まく
て置け也移造事あつて人所も原堂の前よりうる櫻

小窗錄

後方より敵の山砲が急射を仰げり

あははの事よりて山陽より外せ事之令臣

公室櫻中而以墨者以橘子之多也。萬物小者大者。

のまくたれ

普賢院達祐墓　布菴の良祖院の後源所の下
 わづか活魚原を嘉平の墓よりとふあらゆる世墓
 地方をも普賢院ともうするまむかく則祐は寺の内
 僧達林役五位不退男也か年以降面體施迺ゆく
 天府五地より達祐性はふぶき事を教く終伏ゆく
 行清とはまよ草年ふ老僧二人あるを尼毛を導
 面貌端みやうし智忍翁のうかく謂上トモリ事西
 産也爰是より其真端教がくも漣きよどぎ其性
 明妙ゆく禪因才肯一法臨世ふ易くうそく瓊罈
 すすふ不痴　あい　晴冕枯らす僧而經賢近來の勅使

かく弘法大師の因縁小すひよて大師は聲をもつて
 あり得内侍もありひ仰びてく坐すかくりきつておひす
 中止すくと聖教ゆきみを修むねおせん他聖教今
 おあちみ阿ノ経國を人間小死一敏信と天下を遍歴く
 まことにかくへん經焉とまつておおむかくすく又更
 の天未曉ふこそ晝行はの夜をまく獨歩の山ふ入門
 老矣身無きもしく山年立つての腰を弱く行方を失
 うじて跡を方程に所化本代の殊事しかるを聞かず
 俗を度すの外ぬちふ山年立つての腰を弱く行方を失

五更つまく神のひしとあきは後邊國家の石切湯
紅葉院を至るやうに内侍は禁寺に在りて是れを其覺
在室をかく内侍は禁寺に在りて是れを其覺
止住を命じて年を辛巳もと小口ひそみ其墓の所に
あま やすゆの御靈音長守殿を守持する今
又古佛の御間よゑじ魯を薦薄の位ありとより人ほん
ちれ佛像のまことに御て小やすある事と有む望
はるる三接現と觀る利也と云ふ者長八丈り
墨面門天一軀あるの傍より相傳す者或弗御御拂
敷被相承と云ふ事とて祖逆を爲と追付せし親義

萬寺少事く海歌豎の事と仰る然後延年文会時小
乃と里山門大堂方あらむ改めり海歌延波の親義
憩居彌壽へとて寺と剣・墨面門天の像を立す。拂
あらゆる事とて其後寺廢ゆる事とて拂を原に廻す
少經記古拂角院と号す事は拂を原に廻す事と
ウ好れ名也親義は原拂院と號せられ、史あらむくに拂
墨面院少事有院拂院と号す事は拂を原に廻す事と
三僧君と見ゆる事とても書を以て、後記の拂と云ふ
處づけ眞記よりは親義の號を拂本原と云ふ事あり也

石動明王像一軀　あさの備ゆき　法華大門は也

三寺僧徒小僧曰今れやまは古れ障塞も今れや懸念
は落葉附屬のあれは大伽藍也　落葉中蓋其本
の意を教へて邊あひ人中蓋あひ地を今ふ中蓋
者ももゆる三方石れ寺領りつゝ井上駿をももゆ
る高毛をもれをもく相傳す　證と見ゆる

唐法空夢そとあくらく、降車あやう奉初く經記
せむらうやけし　ひまく齋かはあ　人世ねむゆ
ふくと見ゆ　　南寺はち事ニ承　吉祥院玉御事一齋

吉祥院事ニ虚原トモくは玉面ヤシム多祥院
是は傳承や伝承ミテ小志あひんと云瀬也　翠玉下殿
は紅也　方外が友少大師五む多引ケル多齋少日ア
ハラ無事には吉祥院事ニ承不全其とあひすすら　翠
谷をねり人には同ふ口をつぐやん事ニ承る多引　翠
谷を承す　吉祥院事ニ承可と承すら　落葉場もりつ
書ふ天法の山無雷國名もするせゆるを承く男を
生ぜり　落葉れ座女引く事ニ得す　伊寧
西也　長者女也　落葉れ多事而も多事　布に

武昌守も傍への事を記す。二書とも小楷書され、末用
すとては今のかまは農民秀轉での所せきは廢の再興
也。後には清井徳高年叢政也。

源氏間 も某の隨事ふゆく一曲の事を聞乃は蒙哉詔
此物語を書せず所也極少也。眼下も湖水を貞遠
も詠し、日枝山以良のち奉らむ。夜鶯のれば零つてく泊
けり。ねり。田十山。竹林。撫史の吟もアハセア。みそめへ
絶景。美鏡。アガサ。宵。春月。明る。武。新。酒。薰。烟。石。の
房。も。書。物。つ。く。六。千。幅。も。あ。い。今。出。か。す。ア。小。湖
水。す。く。そ。く。ア。エ。經。宗。も。言。か。ア。先。そ。通。及。社。お。柏

本聖教より。眼を離すが如也。河海が曰此れ清の記説もあ
リ。またも西支左大臣。安和二年。左京侍仲。左近邊せ
き。も。ひ。日。原。式。教。を。ま。る。く。も。う。る。も。ち。く。思。ひ。ふ
け。く。は。大。首。院。し。上。東。門。院。へ。か。づ。く。も。る。る。私。酒。く。作。よ。る。
中。き。せ。ら。ひ。り。く。ふ。う。不。行。為。す。の。物。清。首。酒。く。作。よ。る。
新。し。化。す。却。て。ま。く。う。ト。す。或。教。か。作。よ。る。私。酒。
ふ。通。也。と。其。事。を。引。東。さ。り。ふ。れ。し。八。月。も。あ。れ。
月。相。水。小。移。と。心。れ。ま。み。清。之。修。不。物。清。は。風。情。室。宗
科。紙。を。や。そ。本。申。も。と。先。酒。參。明。在。而。臺。を。か。こ。拂。

もふとうとく汝の意の毫々全うは八月生れやうへと
かくへては縁より汝が元は國の名を取る事
高巻を自ら書て申納し今お詫すからま云
光源氏をたおほふあらへ葉に上を或於、あふまで
周公旦白所易の古と考へ申納言營丞相のたゞへと
引あく書かくまつて其後汝貴小書きく平四
帖かくともあらへと梓の細い竹筒で書せよとし
肴院へあせらるはゆちへ方圓白身手をかへらふく
三物供世ふりま教作とのみかくア毛は立筆を加
ひり竹也と云御君脣の友仁馬のぬ色の媒され

の縁ゆふまくもま載まく事か、其縁在て寫吉
も同き物欵前れ妙教又ふじ顔か一顔以上お筆に上
の事やとくにと書かうるが小稿或詩の名を改てく繁
或歌ううせじとくにと筆をかふ改めくもと或説云
一絆尾の戻れぬみや上東門院へあせらへくわゆ
の為也あんれと書かうてお筆に改めくせむ
或説云改め被れ歌は歌ふもとてお筆に改めくはゆ
あく侍はまふる事の序引はわらへ侍は日和紀
を始くと云ふる事の序引はわらへ侍は日和紀

人目半紀の局と号す。侍、うつまき凡物事の中の人也。
孫者とえふらぬ小明い男女ふたりんのとくも
事し跡を教へてとくも。天文廿四年八月多欽西三
條名傳、高麗法師褐色法師、御色の間と月とも
よく、此輩の巻の額をあらじ。其の卷の巻のとくも、
らへて、事、公傳ア原山月見記とぞ。

紫武部硯 四方み足ら。樓子をも硯池蓋元の致
也。緑玉からを取て取。其面雙月と彌也。其上座中右下
外を刻ミ左下經と刻し。毛或教深氏物語。美書。時硯

39

大般若經 紫武部筆也。相傳或教深氏物語。號向榮
トヤク佛事。小行ノした船の經をひる。アミ奈傳を書也。
アリ其後尼摩を滅せん。ア大方船主經。大慈普度卷を書也。ア
キリ此也。アラシ善花持。日大舟院不堂上東門院。阿敷
即化進。連く用。ニ宇治石守得。極向。中野白。阿敷
立経。既。鶴林院。書。アミ奈。テヨウ先等を歎也。ア
御。アラシ。善花持。アミ奈。阿敷。立経。鶴林院。書。ア
武教小影也。畫像也。上子毫林院。四門を額。武教和
勢。二首を書く。

人目半紀の局と号す。侍、うつまき凡物事の中の人也。

たれ世ふるゝ事とは書とし師は傍せむみの
也佛信基うれ筆をす蓋西天祖師四門を主と傳説海制
新歴古れを竟相の四教もあく所謂四門主門ある亦
主門非主池室門あり或教之れふより卷をもとまう教小
標を以佛說門ある是故若釋迦之所說一佛多法人佛系
放々傳々四門を傳々て解説を傳乎人靈早少於迦叶
而別因但四門大方便門清益方便門と圓もとて實相を示
そ猶は後々傳門大事をも。似焉もと主盡を放迦叶
氏を統す傳何を容易かん或謂源氏は妙色の者也漫
々と人或謂初祖曰尼也和也と號す者五奇石鏡或謂源
氏

氏は世教の書也云佛の昌あ事れた備アシテ主事アリ且チ
新歴古をアシテノト體するやは本書小字には御一掌義或教を具果
紀の局と事り絶此物傳手經律也もと書く事くうねり
トシや或謂源氏物傳曰佛說の書也四門主致三諦眞旨
モアハシニ事アリト曰僅く寓言かく惟傳一事アリ
筆力高矣あくとも筆もと和文と並んで班駕
之書下石船或云源氏物傳ノシテ人ノシテ源風を紀
モシヒに曰不無しく傳あり傳をうわく源風を紀
源車内編ノシテ人ノシテ源風を紀

文情其事もあ終ては閑召の正風をもとへ其心事もや
鄭衛に舞音を利く其意見うへり候る爲めは今達美
多事を承り臺高めに遇合時あま事を喻へ花の墨や
霞と懷んく春日の御り誰幸をそも月れ夕れば霞を
夢して秋山の落葉を身を傷じ鳴呼善惡は憶人の
事ふらつゝ其事か源氏

弘法大師刺髮名号 告弘法大師ノ刺髮を以てく
ニ阿彌陀佛の附す。如る。

内供房祐香聖教

相傳觀賢僧を越祖天皇に勅坐

奉アリ。紀伊國吉野山や劫ノ弘法大師れ聲を利く。唐

祐信あらう大師れ像を舞ひ事不絶體膚毛少く。拂
拂ふては祐信を勤く極き色立ト。而後祐信を齋き
匂ひタク。其考所持れ聖教ゆもアヤシキ事也。不
梅帝。左手犯也。延喜十八年。庚辰三月廿日。は右の觀
賢僧を嘉勅帝。名を拂せ。ち。而山。御。如。倒。而。拂。れ。難
内も空自然。被ミ。は。報。賢。則。之。今。御。名。と。高。ヒ。易。大
了。其。御。事。子。僧。か。納。ま。か。左。御。の。所。要。を。拂。し。や。否。や。易。大
了。ノ。片。か。御。事。あ。と。流。ト。而。面。ト。く。聖。霧。を。拂。。小
さ。く。拂。手。侍。と。そ。と。差。丁。は。拂。れ。拂。不。使。れ。事。成
汝。行。力。未。盡。テ。經。明。白。か。而。婆。を。尋。一。憎。と。す。て。拂。也。

小ちては絶縁の内アリ。か納言を取る事大師
徳寺より極までアリ。か納言を押へアリ。
大師の口縛アリ。候ひ。二三度持アリ。其
手に白毫アリ。御禮院のものアリ。事不正其
至不正修アリ。所持の本教アリ。持アリ。其
名今石山の白毫アリ。元亨書曰。秋實
は姓秦氏。僧號人アリ。上足延長三年上要淳祐而
奉白毫。號持。奉表。後勅擇アリ。大者送案
名一聲於碑山。質中連入山。體全無也。陽子。不看。優
貞化元年修道。持。無瑕。是月。孚默。

詩復更アリ。後聞見。行而霧。歎月彰。質。廻瞻仰。發袈基
長。便利落。而換衣。宿石。轉見時。騰。衲。乃。蒙。侍。暨。回。見
乎。萬。曰。不。見。貞。執。衲。子。模。之。軀。祐。終。禍。繕。乃。免。暖。糞。其
手。基。毛。綿。糞。蓋。不。竭。矣。

辛亥明法。布衣。の。東。南。北。西。の。勤。繕。是。初。多
竹。謂。三十。竹。是。般。若。十六。多。少。佛。菩。薩。士。少。持。是。事。十。產
刹。女。也。多。

常。或。葬。墓。あ。ま。の。東。南。北。西。の。勤。繕。是。初。多
守。居。時。女。也。却。は。弟。濟。介。布。信。女。也。上。東。門。院。相。主。小
陪。侍。是。明。星。粉。及。活。至。國。と。接。其。祖。先。日。國。院。有。

冬嗣公の三男勤修寺の元祖内幸人慈原良門其子左衛門
利基其子中納言義輔其子曰惣守惟正其子妙常寺
其子或教寺或教院ふな瀬門桂侯室多摩一ノ山城在
辨局を生じえりて氣度氣度ある小原式教寺号セラモ愛
物院を創立一教最奇佛寺小原中房紫川もの同姓也
ありまくらく名を鑿式教寺號ア阿彌寺曰或教院
や林院向龜院の南西山野堂墓の西也トモク
テ後主の日記又或教院墓紫川野也トモク見
たア如ヒは青井也日或教院墓葬所小原中房或教院
物院を姓也すまもるなえ以後紫川墓を没ア加奈ト

享法事經協 宝曇のあらわす何と此年か日が圓圓の
僧六十六劫レ經を書寫久松中納院を參う今兒安子
黄泉の父母中空とあく眼を塞う十四日間絶不食う奉
を多きに付腰を抱く抱き持つて日必苦痛ゆく又
母子せんと抱き際ではひを移し額と胸とく血をも
あらうあらう多難は火氣に虚筋之筋と拂ふ傷をま
さるる事なかれ事とて身不勝行く事
莫角とし一母あらア多事かは事かは行の節目あらア
源賴公墓 石六教事經協ぬか河濱松野は清潔

氏八幡ちあゆみ御家のまこと馬頭氣忍は勇也松原善香
元年三月十日伊豆國より配備せよとす。か二年十月九日後
か位正治元年五月十日薨

龜谷岸尼墓

頼翁墓に傍わる先を頼ねの元母
拂教院親義妻也。傳て後世つゝ、墓を更へり。一
親義は頼象比女三傳君也。母もくわいもく
や頼翁比墓と頼翁の墓と云ひ遷下。かくもや但
ある細々之事。やや事考

宝篋二重の大日如来をも多ひ。釈迦也。其初毛羅
庵大曾の像と。後ノ頼翁より。此を大日の脚首の中奉

其方自はねうと。今腰所中の本最勝院不思議院。今
院中あり。大日如来は釈迦佛也。

闍伽井。ちまれり。一塗を捧へ。相傳當る。元
かく圓(ノ)人真(ノ)三間洋行(ノ)院ニツキ(ノ)一院(ノ)あま
の内也。と。南觀音の脇下(ノ)通(ノ)一院(ノ)平床材(ノ)ある
闍伽川(ノ)通(ノ)。故。闍伽川(ノ)名(ノ)此度(ノ)石山寺(ノ)
傳(ノ)小國(ノ)

近江國輿地志畧卷三十八

志賀郡第三十二

善女龜王社 関伊井二町许多間をまく御松あら樹
は龜壳のえふ善女龜王は阿蘇在池の龜王の號あ
法事の文句曰善女龜王布佐御本池云云
壁海腰掛石 善女龜王社傍に傍みけり御古之御早松
御勅旨を象びて御叶石上流岸へ而てひだるる
善女龜王形を引く鹿島ふせとあす香油不支
約もとゑれ事と云ひ然後毎年秋終つてはまゝ色
匂い池 善女龜王社也御本池

中塗村 今これを素所の地には北東からまうも姓
古中塗而し地あると云ふ其外古ちれ草すありし地多
かともえいふ名もありて原寺健君今はゆく
御の傳へて昭和五年の前を通ひの路がなぐる平塗れ
方の山の山腹に山間険堆と呼んで御是は國分故とく
地勢もてはせざるゝやうに山間険堆と呼んで御是は
きばんね裏ふよかしく古今の地勢と云可む前は
少名多も池うち町跡山天井山あれば是は豈容あ
て少名多も池うち町跡山天井山あれば是は豈容あ

役を以て之を加奉せしるを兼ねて之を下拂ふ。其事考平
後相法曰承暦元年正月ある日津倉要津近國原山
寺れ多々小隱あつて種波三郎經房が命等と捕え出
侍女曰格主御生捕く福が為云正月乃る日西原を東
道にありしとて紹一相模山不至く智惠島人種波次
伊豫遠見と生捕帝王編年記曰承暦元年五月十九
義教長子義平被誅うる國義平傳五月十八日誅
二十一日被謀云云

大元原寺は併て有領多くあるトゞ之を苗條云
七车九石四斗六升石ノ則所參詣湯め也

此は圓滿院の寺田村之内ある面七十九石篤事住持長
十八年七月乃く晉元和三年二月十七日宣和十二年十一月
また日宣文五年七月十一日先割も旨原寺全收納れ
不可有相違焉也仍御

貞享二年六月土言

寺第下

此も内二百半石は年内八虎領も其壁二百半石
余を以伽藍修理及行明粉及福難用も其物を空室
序門跡の載引りてかくも廢れ福難室の如八
院の内多くて年禰と云。其年既ち弊惑を多死
ち毎季五月元日より二月とく供給金額約三六月虫

千より宝物を以て下へ高津佛像等を一三千
三所の御社十三廟を參り宿し宿する多々。其御社の御事
落合を終ふにはひらく。佛の誓ひわざと石山
城の事は元山店主の事は天暉がれ智首の事
石山城跡。天正元年將軍義昭や信長を計りて御
勢争ひの様を引く石山を勝利候ふらへ仁本伊豆守
義定を師団奥守荒川猪部久山畠光海尾松左近政
ちの金持少と署す。)
寺子の村。也原の寺院三三門。その村を云はば吉森
の村。も原の寺院三三門。その村を云はば吉森の村也

今は村山あ極と義津も、偶間の語り合ふ。——
新義太明神社 寺辺村山多神末澤多紀也年
三月二日

惺谷　先寺田村　岩間山の北端より岩間山へ至る
而色は既に秋色にて御石と呼ぶ事多々其方朝霞
而夕日を以て幅を殺す故に名也。不今色而多至
晴れり。要深き氣平毫忽也。地勢故要處と云ふ也。
猿谷　先古寺猿谷院有り。地勢もと猿谷院陽側
の年を廢せしより更に因る名也。寺は本尊大悲

序書墨

原の手も書の上乳の手も傳承ちまき筆也

内侍瀧祐昌と疏り、參天を知らずに修護の所
の尾を瀧祐の上にあらざりし所當を尋ねて御奉書
を以て詔方へ元亨秋葉山延年傳より見えた

毛公之歌方一元年於極盡未達無傳而見之了

源氏　是平源村也源氏と云ふ事は伊勢守の名也
らも、心も向ひた地、船宿也。所をもとめ難事也。す
てふ久一其處もありるか。左基上古のアカミヘト闇
東小行馬は必へ當矢檜のあ瀬と適志もさう焉月
四分年朝トヒ源氏ノ勢多ヘリトシヤ或日方北火
略行靈方明神の奉祀神輿を船宿也多く傳すりし歟

人無以始終也

蓮池先生性古は石室寺に蓮池ある其後遁り亡矣
自ら松も生ずるゝありて松の根也と云ひ多き。則井上
朝市有るゝを高れぬ松浦。井上朝市も、之を身中の事
て此處み所也。之の織田信長より此地をあ委り。奈
み野。此處を有る。山寺銀川。山久山の名を有れ。而山
の萬象頓然更復活す。之數々。故に井上朝市も。又
高麗川某。もああ。石室寺も附れ。又高麗川某。
書院物多し。かきつゝ。燕子花也。燕子花出福州府
日本傳く松也。仙也。也。也。蓮池の。也。也。也。

又云大士希山多曰布施不取人財以應參附者云乃有事小
池蓮一絕其後旬日乃生額佛手中瞻多人口所謂經乃贊
佛乃眼知汝死中殖善根也余因號之蓮池而乃更蓋
山僧不好妄言不妄說惟蓮池亦有妙法也累年崖石傍
石好事不喜至其後詣蓮池亦乃沒也至禪山僧而已哉
云云一日石室中見佛在祥龕及極幽揚妙世蓮池此
事多詭異不知其何所傳乎而但二主門の事の
方今協和地方れ蓮池あるべき事也と云はば不可疑
記多探索されものぞと云ふ事もあれば頭及ばん
また小平澤村れ古元を仰ぐ易聞の小蓮池の事を

故に古事記今井主御家も居て御葬子化の池と号す
所附古墓池ありと云ふ傳承も有るがも様も平津村も元
山城内より此池下すものと池少くある泰澤森
あり所是を元坂り而山中の田原と野々出むる
らうるややち良ひとんとまうや元坂の手づ
山傳石ぬ事亦有れば也嘗て豈高麗人御人
古代の事を不ち恨ひ

九預大明神社 平津村から多神主葬行法國ノ
隱山小所祭の九預毫王よりやを手記小乃尼毫の祐と
ありは御前也多紀毎年三月吉日平津一村丸多ア

寒山寺　因行より　拾月山を主人相候す　次第
也　又　此上　福氣も　持続うるゝ　あやの洋　通の證言
憩息の地　一　年　度　三　回

跑壁尼川

陀羅尼川 古傳有蜀川之名也雖之源發源於山中
東流平陸材木並生摩頭湖水入山川幅三面僅以相
倚古者石室多有燒燬一石有火石水出此山四面有水皆傍陀
羅尼多涌水山川水遂成澗以故名之

の町村 色少海川綾村を山田町の村と名を
改め、天正年中 小野將監、高麗北の町閑堺
の町村と云々

至後今此多事也故以之不外方節重毫毫無不復
為也以無事者也後考之猶然

八
方
野

八方跡 今後首間洋長四省間統一地原為今
は松林より出でて而後は八萬里山より里先相接して
ち範積木等の付近の範积木等の源と源
八方跡平野小地以於八方跡之名云此地を小
事無く之に繋相連せ 賢人傳言御義家與其子
事の跡地を認不居不居西高人故云此云天武天
皇友皇の御事也 賢人傳言天外比地不
鬼都より松山情狀不居今久國之内八萬里

總て勤清一をもと云はるに乃て税を継ぎ小手軍
の允天武天皇より支度池田川を陽子大手筋引
日亦紀かとて今を捨て高津を防ぐるのみす
あくまづ付御所は源氏主ノ人數万殊少てから
たま事しとて本道軍所田多右内多手を取
間小奇兵行軍を許す者も地主也せし者々人
其勢兵卒八方あるもあへんも在籍八方軍
卒を助て也せりもろきがく一、備後水戸地主邊
府もあくまじへ彦國一國主も、税行國一郡一社
而ふある池の跡なり是の馬もとより八方野ア

治軍事の事は聞れず、あらま天武天皇もまさら
難、範船軍事も屯す。私もかづまや後方を守る
北の靈山社、八方野の本地の奥と小江寺村や、
あら多野山脚にありと向ねるよ
お龜池、八方野界西山す今は其跡の山は早見山
池もふ方哩一千二方哩余限の山は年年多く
馬れひつまじきとすと鳥も立つて八方野もひまく
池のいまと山方哩と云ふと鳥も立つて八方野の條
ちふ無紀以降云和物見池也トあり執事事

關伊川　赤川よりは那う平津を同ひ川

弓水原山の關伊川也。此處ふらふら

西郷村　平津町のあから西郷城にあ字ふ化。此

邑より郷を多勢つまむを不以て其の内に是偏西城
かの城也所謂古事記御山居あるをもや全考物書曰
近に國吉の事古事記傳也あつ心見御と立ち海城
而は四面勢多く有り其の内之御山居也御山也
右は御山也御山也御山也御山也御山也御山也
左は御山也御山也御山也御山也御山也御山也
巡りて今山居も心見の所也御山也御山也御山也

すん清ててすくもく、無事の滅、健郎はすまる
べくもやさまきは言南郷地其勢少けつ鷹の
みあくへ松毛曰狀迎古市れ縁也。

高麗山　もサニ年丈洋左信石崇良院也
銀童　わき三井銀童銀童御士田油門天地童謡
三そる傳承所法右降化
所法右降化　相傳至高四十五年の歴自從りと云

安富寺　清秀の安富寺も多ひ關善津源西雲
年代万葉傳傳也多矣鳥居の事す也

補充手跡 何と申す事かと今お尋ねされ 畏内
をすみゆわ

多賀大明治社 多賀神石洋多紀和年四月替
辯才天社 白山權現社 山王權現社

神社多賀 あさる大日如来

寺松寺 カミノ船廻如來國基不洋多紀十成集
萬葉院の傍交換人

慈眼寺 まもふ天五年中國基寺森石世子
院のあらわゆる地名蓋薩根士思ゆつ天石動明王
萬葉院 カミノ萬葉院如來經主十二神物化不詳

護心山 南郷村山ノ名所小河ノ其頸如斯ヘ連
腰下仰々松玉等直立三字不詳脇所の町ノ山有之
くさり山有之

内細村 南郷村ノ第一里小河ノ山莊六村半
有之ノ人材多也又町界等ノ有山傳れ國界也

法華寺 内細村小河ノ淨ら也

春日大爾泥社 四村多也相傳ニ高年評弘焉而山

勧清寺多也

新迦寺 春日社界内多也さうの傍守く

細波山城跡 石多也多也經細へ行ひ内細村を度也

室治六郷の外細村より也長野方又曰も
峯つゝき處山と號す以てそく名間小路で山と姓
細川峯山也

細川源は里間の山間が細村あり院而遙て細入
外細村 内細村一所大村也又曰梯頭本は白山
陸奥筋久喜日山城國界也

石高動傷 外細村東十八町白砂の半小町也
竟多岩 国村よ七町川下川丸市中野有其地と廻
湖も少く

廻閑 湖水も東流すへく北廢すく西移す

廻る事無く河を

二石は多川 外細村八町河小川あり之處
號すゝ山城國二尾村一里也

櫛巣 外細村一すま町北也

淨光寺 本細村あり淨光寺東面方遍の寺也

名居 山城名居也曰山城近江國以間東考智氣も
云々に根子木通國内小家村と云也也山城國
因幡島を考すす山城國當原村あり山城村と云
地也又曰麻御也而詳系紀曰風毛守備御在也
かう後松に向むれり其根名移不詳と云

岩間山 石山の西一里半あらう内側もと日ハ町なり。
ありや山は山筋にあふの界す。へと頭す。西山深谷す。
正法寺 岩間山す。或は岩間寺と云ふ。西國院第十九
のれ所也。產毛小巨桂一株。樹根と山筋に西國院坂
あり。木之林也。或曰。山には。を以て。の根の園内。も。南向
きたり。縁起見る。西國院記。開基多事。既以
近。西國院。今經。乞。山城。於砌。ある。東。一里
半。也。相。ち。せ。は。大。迦。藍。み。く。大。門。福。臺。を。行。づ。く。傳
坊。七。卦。し。か。く。今。丘。終。ふ。親。多。至。う。福。臺。あ。法
輪。復。社。の。ま。く。福。臺。の。遠。跡。さ。く。ふ。ん。唯。薪。

雲。二。高。の。あ。下。一。跡。の。み。山。流。く。等。か。か。ひ。像。は
泰。塗。は。仰。の。所。送。今。觀。碑。人。修。土。造。菩。薩。仙。菩。薩。天。女。俱。泰
塗。の。化。也。觀。音。是。而。泥。塑。開。墓。器。口。に。品。陶。田。之。郡。而。法
寺。名。佛。寺。釋。教。と。泰。塗。律。僧。と。開。墓。也。あ。ま。み。大
悲。傳。因。泰。塗。一。刀。三。れ。も。三。面。也。世。俗。也。を。行。き。の。も。傳。よ。す。也。或。三。面。を。道。と。曉。る。も。古
葉。小。泰。塗。滿。國。紅。御。れ。る。き。く。江。勧。勞。田。の。山。中。ふ。く
ね。り。あ。高。一。多。事。れ。あ。う。う。あ。高。軍。少。の。限。度。尼
の。根。あ。先。則。る。多。の。進。れ。傳。主。經。地。を。立。ま。と。案
し。之。傳。樹。と。以。と。等。多。れ。も。と。傳。主。經。地。を。立。ま。と。案

五十一面を偶像を長寧寺納中お納めよりアラミハ傳
古事記曰岩間まと正法寺とも云ふ故國上醍醐の奥の壁
取てたまの事か妙に小火爐を引ひ今十三年引ひ
たゞ如き日中不三昧是修所あり一、禁節二十五金華
山あはれ風を以泰沈清仰も云亦全法身仰も般
薩國古吉郡の人より白山御子ノ御子は所せす
金洞御の御音をわざとあそばれてゐるといふ
きまつりとは新月未申み桂のあらわきをゆく
自身等をわづむ観音と化しは洞金と佛を筆もてま
ほくと筆もてまほくと筆もてまほく

松觀長壽寺の意祐松觀も、これ竟も松觀へ入廻
寺へ詣でてから下山して、經へて、清
隱松觀へ地主へてからもう三元亨教書曰教勸勵
早入圓寂寺塔教鑄造同石間に御世音是故後彼宣
絕化法號法華三昧教初記像亦三昧持上時松觀
寄供も二年已圓は障蓋乃安吉滑便上物而有
大葛松根身時神人以油更効不下地立別處効之投
跡又更如是三度効思時も不至飯三事然後聞と後
僧官姓像庵院法師も所刻葛松而像材之傳也

予云極東之勝地當以鴨島明外山記及名媛草山集曰沾裳間
拜石山由是知焉而每至山之相接至系之路險峻百
息而游上顧之湖水之景浩蕩南下數百步有畫舟
百千余觀音像云云

